

高野山西南院蔵「和泉往来」について

遠藤, 嘉基
京都大学教授

<https://doi.org/10.15017/12330>

出版情報 : 語文研究. 10, pp.1-10, 1960-05-30. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :



高野山「和泉往来」について
西南院藏

遠藤嘉基

(一)
この資料は点本ではないが、文字・かなづかい・符号・音韻・語彙・語法の各方面にわたって、深いつながりがあると思われる。そこで、その紹介をかねて、いささか卑見を述べることとした。

(二)
まず、内容の一部を次に掲げる。これは、八十二月Vの贈答の章で、この資料のなかでも、いちばん短い部分である。行数と、一行のなかに収められている字数と符号とは、すべて原本のとおり。漢字は通行体を用い、かなも、現行の通用体になおしたが、古体をかなり存しているの、それらは別表で示すことにした。ただし、(レ)は問題を含むので、ゴチックで、そのまま表わしてある。

本文の右に?を施したものは、漢字・かな共に何らかの誤りと思われるものである。すなわち、墨餅(2)↓黒餅・老遇(6)↓老遇・聆愚(7)↓聆愚・手音(8)↓干音・微随(8)↓微匠であり、早流^ラ

(3)・日車(3)の片かなは、何らかの誤りであろう。潤^{ウルホル}(7)については、後に触れる。また、⁺でかこんだ漢字は、一ど書いたらえを、さらに筆で加えたもので、かんとんに判じがたいが、前後の文脈から推しあててみたもの。この類のものが、この資料にはあちこち見えるので、完全に読み解くまでには、また時日を要しそうである。

次は、返り点についてである。ここには、一・二・三が用いられているが、その一が、たんなる点のように見えるのがある。すなわち、計三菊水桑田之年(10)の例のようなときはよいが、易三廻(4)のような、普通ならばレ点を用いそうなばあいは、むしろ点に近い。ことに、餘日不多(2)のようなのは、返り点ではないかとさえ思われるのだが、実例にあたってみると、いちがいにそうとは断じがたく、その弁別はたいへんむずかしい。そこで、これは存疑のまま、いちおう一で統一しておいた。では、以下に原文を示そう。(一)で数字を示したのは行数で、引用の便宜上つけたものである。

(1) 年シテ至ラウ嶺クツニ 月ニ嶺ニ 雪散ユキサレ 花ノ節臨ツケ 臨ニ 窮冬キウトウニ 一ダニ 潤ニ 水營スイカク 二リ 玉ミカク 遺コト

(2) 旬數少スクナシアマノ 餘日不多ヨリオホクナシ 墨餅丸餅炭薪スミヒクワシ 松塩マツシホ 梅白散ウメシロサン 荒

(3) 卷解文進マクワケ 向之カウヲ 年何早流月舟ツクハラツキ 難カタシツキ 繫ガイ 一生涯漸イツセイシヤン 頽ツク 日車ニツキ

(4) 易ヤスシ 廻マクリ 是則爲三チメナリ 表ヘウ 二セム 近習チカニナリ 舊勞キウラウ 也コト 返事

(5) 風霜早往サウクウキキセイ 星月自廻ラマクレリ 年季高キタカクシテ 天ニ 月涯ツキハメ 深地フカシチニ 下官ゲカマンニ

事 公一

(6) 逆鱗ケキリナリ 顧カヘリミルニ 茲コト 无藝シヨキテ 一ヨ 齡ヨハヒラシ 老邁ラウマイ 也コト 身彫弊ミテウヘイ 也コト 雖レ

思ト 无益シヤク

(7) 雖吟ナケクトリダ 一コト 有徒クタクウル 愛德澤アイトク 潤身ツク 矜アキスニ 感飽カンボウ 心ココロ 生前シヤウゼン 之分ノ 只タリ 今イマ 云ク

(8) 足ト 一片飼駒カヒコモノ 上倍色革手ウベイシキカ 吾誰以奉ワガタレニ 之ノ 雖レ 二ニ 此微隨コト

(9) 特コトニ 絶御覽ヘテ 二ニ 愚山ウチヤマ 一コト 呼ノ 告共ツク 焉トモノ 供カレ 蓬壺コウノ 之節ノ 德トク

海三

(10) 變ヘレ 同シテ 計カスウク 二ニ 菊スイノ 水サレ 桑田サノ 之年ノ

(三)

以上によつて、だいたいの見当がつこう。これは、明らかに往來物の形式である。ここでは、最後の八十二月Vの章だけを掲げたが、実は全篇が、正月から十二月までの、贈答の消息で収められている。この点で、「十二月往來」(鎌倉期の初め?)に似てくるが、それが事務的な短い文章ばかりであるのに対して、これは、文学的でさうとう長い文章である点に注目しよう。そして、この「十二月往來」などが、新潮社「日本文学大辞典」(1)の解説によると、「鎌倉期のは、実際に手紙として用いた書状をかき集めたものではなく、初めから模範文として、書き綴られたものらしく思はれる。」(三六九ペ)のに対して、この資料と同じ平安末期の往來物が、「いづれも消息文のための模範文例集であった。しかもその模範文例として拾いあげられた所のは、主として実際に手紙として取遣りせられた書状であった。」(同前)と述べているのは、このばあい参考になる。この資料の、作者あるいは撰者の問題に關連するからである。

では、この資料の作者あるいは撰者ともいふべき人は、いったい誰であろう。そこで、手がかりになりそうなことばをさがしてみよう。

下官(一月・四月・十二月) 愚僧(八月) 小僧(九月)
少僧(九月) 末僧(九月) 某僧(九月) 野僧(十月)
愚下(十一月)
が、それぞれの月の章に見える。おそらくは、これらの人々が、そ

それぞれの作者だったのであろうが、普通の往来物に見えるような、官名・役名・姓名がないから、何とも考えようがない。ただ、奥を見るに、本文の最後に「和泉往来西室作」とある。西室といえは、げんに西室院というのがあるが、これは、この資料の現所蔵者である西南院と、法類関係にある、ごく緊密な間からである。とすれば、あるいは、(a)西室院関係の誰かが(合作であるかも知れない)、これらの「高野の僧と、同門の僧もしくは役人との間に、取りやりされた書状」を撰して、「模範文例」として手を加え「書き綴つた」のかも知れない。それが、この資料であるのかも知れない。とすると、これは平安朝の往来物の性質に基づき、鎌倉期の往来物の性質をも帯びていることになる。あるいは、(b)下官といふ愚僧というのも全くの仮作で、高野山の西室院で誰かが単独で、もしくは何人かと作つたのかも知れない。とすると、これは鎌倉期の往来物の性質に近づいてくる。すべてが仮定である。しかし、いずれかといえは、その内容から推して、わたしは(a)説に傾いている。

同所點了

新別所申時許書写了

金王丸本也

文治貳年 四五月 書写了

とある。「四」が消してあるのかとも思われ、いささか疑問が存するが、とにかく文治二年(一一八六)書写である。とすると、原本があったことになる。ところで、写本を一見すると、(a)第一行と第四

行(b)第二行と第三行とが、それぞれ同筆であつて、本文は(b)と同筆であり、(a)は加点の筆と同じように見える。しかし、よく見ると、それは筆の細さ太さの違いによるものであつて、むしろすべて同筆と考へるべきもののようにある。とすれば、加点も書写も、文治二年当時のものということになる。加点が文治二年ということは、この資料の音韻や語彙や語法などの考察のうえに關係してくるので、ないがしろにできないのである。

因みに、「新別所」とあるのは、いま「真別所」といつているのと同じであらう。歛喜聖天供次第(高山寺)の(奥)に、

建久□年三月十一日以新別所御本交点了

とあるのも、この高野山のことである。

(四)

前項で、この資料は「和泉往来」であることがわかつた。ところで、これは△zumi orai△なのか、△kwasen orai△とよむのか。

伊予往来・上田往来・飯田往来・駿府往来などという、往来物の名を思い浮かべてみると、△zumi orai△ではないか、といちおう考へられる。ところが、これらは、それぞれの土地の産物について書いた、いわば地理科的な往来物なのである。では、この資料ではどうか、というところ、和泉という地名に關したものは、何ひとつとして出てこないのである。地名らしきものといえは、西京・五条(二月)・鎮西(四月)・賀茂祭(五月)ぐらいのものであらうか。とすると、地理科的な往来物ではなさそうだ。それに、この類の往来物は、だいたい江戸期に入つてからのものである。

では、平安朝の末に出た「明衡往来」のような、著者あるいは撰者の名をつけた、そういう類のものであろうか。しかし、そうでもないようだ。というのは、和泉守とも呼ぶべき人物、あるいは、それに縁のありそうな人物が現われてこないからである。人名と思われるのが出てくるのは、美作新司・六秦介・猪熊高移介・猫面兵庫・近藤椽（二月）・道祐（四月）・宣尼（七月）・専寺別当法印（九月）・一心房阿闍梨（十月）ぐらいのものである。しかも、作者もしくは撰者と考えられるものが、三で述べたように、高野山系の僧侶かということになれば、「和泉」を、地名あるいは人名と見ることがむずかしい、ということになる。

では、どう考えたらよいか。ここで、往来物はだいたい音読するのが昔からのならわしだ、ということを感じ合いたい。ならば、これは△*kwasen* *Orat*△であらう。この資料のなかでも、△和△の字は、かならず、和風（二月）・温和之比（五月）と類音表記していることを参考としたい。あわせて、この資料が平安朝末の書写であることを思いたい。このころの往来物は、先にも引用したように、「主としては実際に手紙として取遣りせられた書状」であった。それが「模範文例として」拾いあげられたものだった。それは、よい文章であるにちがいない。

そこで、わたしは思い出す。杜甫の詩に、

佳句染華箋（九家集注杜詩卷二十九）

とあることを。華箋とは、人の書状への敬称である。とすれば、後の世の言い方になおせば、まさにこれは、文章往来・書札往来にあたるであろう。華は△*kwa*△である。和の音とも通じる。こ

う考えて、まずまちがいなかるうか。

（五）

では、ほかの往来物と比べて、この「和泉往来」が秀れていると思われるのは、どういう点であるか。

その一つは、この資料が今まで知られていなかったものだ、ということである。岡村金太郎編「増訂往来物分類目録」（大正十四年）にも確認されていない。

その二は、書写年代のわかっている、現存往来物のなかでは、おそらくこれが最古のものではなからうか、ということである。もちろん、原作がこの資料より古いものはある。かの「明衡往来」（一〇四〇—？）、「東山往来」（一〇八六—？）などがそれであるが、現存のものは、いずれも後の写本のはずである。また、堀池春峰・田中稔共編「高山寺遺文抄」の「附記」の記載に従えば、「平安時代末期を下らぬもの」があるらしいのであるが、これは「奥書無く」、年代がわからない。したがって、現存往来物のなかでは、「和泉往来」が最古のもの、ということになる。

その三は、国語学的にみて、注目すべき資料だ、ということである。全文にわたって、ほとんどといってよいぐらいに、古体のかな文字を交えて、原漢文の訓読が施されているからである。もともと、多くの往来物のなかには、「尺素往来」「庭訓往来」（書陵部本）のように、かなを多く訓読に用いているのがある。しかし、それもだいたい室町期あたりからのもので、概観すれば、かなで漢文の訓読を示している資料は少ない、というのが普通なのである。平

安末期から鎌倉時代へかけてのものには、ことに少ない。したがって、たとえば、稍・密々・事々のような、往来物によく出てくる文字を、いったいどのように読んでいたか、ということになると、さっぱりわからないのである。(もともと、「高山寺遺文抄」による、所載の資料には、送りがな・ふりがながあるらしいのであるが、印刷の關係で記されていないし、未見でもあるので、この分については何とも言えない。しかし、察するところ、たとえかながあったにしても、普通の往来物のていどではなからうか。)ところが、(□)で実例を示したように、「和泉往来」は、実に豊かなかなで、字音・字訓がたんねんに示されている。だから、これによれば、たとえば先の、稍(二月)はヤクヤク、密々(二月)はミツミツ・ヒソカニ、事々(二月)はシレシレニというふうに、少なくとも、ヤクヤクはヤウヤウの語源を考えるうえに役だつし、密々をミツミツニ・ヒソカニと訓んだことは、「庭訓往来」(書陵部本)の五月の章で、「密ノ字(俗別ノヨミ)意アリ、別ノ時キハキヒシキヲ記ス也 俗人ノキハヒソカニナス意ノ□□□□」¹⁾と注していることと合わせ考えるべきものなのである。また、事々をシレシレニと記していることは、レの符号の示す内容と考え合わすべきであらう。いずれにせよ、この資料にあることばは、元来往来物のことばが「各時代に実際に生きて用いられた俗語などを、多数混じっている」(「国語学辞典」七七頁)、と考えられるだけに、国語学的に見て、興味ある課題を投げかけるもの、といつてよからう。

そこで、まず、かな字体から見えていくこととする。

かな表(別掲)を見て気づくことは、わりあい古体を存している、ということである。しかし、それとでも、格別の古体があるわけではなく、だいたい文治二年前後の資料に現われる字体と一致している。そのことは、大矢透・「仮名遣及仮名字体沿革史料」および中田祝夫「ヨコト点図録・仮名字体表・略体仮名総合字体表」にある、各資料のかな字体表と比較対照してみればわかることだから、ここには述べない。なお、それら各字体についても、参考資料と照合しながら詳述する必要があるが、これも省略に従い、問題になる若干の字体(*印のもの)についてだけ、解説を加えることとする。まず、かな表を次に掲げよう。(六頁参照)

次に、存疑のかな字体(*印)について、説明を加える。

キ 鶏頭草△ミツフキ▽(十月)。用例は一か所。

フ 懇力△フシロク▽(十月)。用例は一か所。字母は「己」であらう。この資料に近い年代のものには、この字体なく、管見に入るところで、高野山竜光院の「法華経」(一〇五八)・醍醐三宝院の「法華釈文」(九七六)ぐらいか。

入 矜恤△コン人ツ▽(七月)。用例は一か所。字母は△須▽。「法華経」(竜光院)に見えるのが、この資料に近いものであらう。

フ 守△マフル▽(十一月)。△Ehaburu▽であるのかも知れない。それならば問題はない。俗語ということになる。ただ、この言い方は江戸時代からではないか、と思われるので、い

ン	ワ	ラ	ヤ	マ	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
レ	ワ ロ ロ	ラ	ヤ	マ 丁 上*	ハ	ナ	タ	サ	カ	ア
	井	リ	イ	ミ	ヒ	ニ	ケ	シ	キ	イ
	井	リ		ミ	ヒ	ニ	ケ 千 ケ*	シ ン	キ ノ キ*	イ
	ウ	ル	エ	ム	フ	ヌ	ツ	ス	ク	ウ
		ル	上	ム	フ	ヌ	ッ ッ	ス ス ル*	ク	ウ
	エ	レ	エ	メ	ヘ	ネ	テ	セ	ケ	エ
	エ	レ		メ	ヘ	ネ 子 尔 ッ*	テ テ	セ	ケ ノ	エ
	ヲ	ロ	ヨ	モ	ホ	ノ	ト	ソ	コ	オ
	ヲ ッ ッ	ロ	ヨ ユ*	モ ッ	ホ 甲 フ*	ノ	ト	ソ	コ コ フ*	オ

ちおう疑問としてあげたのである。用例一か所。△*maburu*▽でないとするれば、ホであろう。そのばあいの字母は△保▽。他の資料では、「地藏十輪經」(八八三)に相似の字体が見えるくらい。やはり、フであろうか。

上 維磨會△ユイ上▽(九月)。用例は一か所。字母は△末▽であろうが、珍らしい字体である。「弥勒上生經疏」(天曆年間?)に相似の字体がある。

个 入路△ミ个ヲイル▽(十一月)。用例は一か所である。个に似ているが、あるいは、千の草体化のとき、筆がすべてこなくなったのかも知れない。

コ 毀着△キコ▽(十月)。用例は一か所。字母は、おそらく△与▽であろうが、珍らしい字体である。

… 鉄△クロカ…▽(二月)・鶺舟△ウフ…▽(四月)。用例は二か所。字母は、△衿↓小▽であろうが、他に例を見ない。

ル 嬾△モノウ、ル▽(八月)・忝△カタシケナル▽(八月)・潤△ウルホル▽(十二月)。用例は三か所。最後の例は、△ウルホル▽と訓んで俗語かとする考え方もあるが、嬾が、「名義抄」に△モノウウス▽とあることから推して、この三つの例は、すべて△モノウ、ス▽△カタシケナ(ウ)ス▽△ウルホス▽と訓むべきものようである。字母は、△須▽であろう。これを△ス▽と訓んでいる具体例は知らないが、中田博士の「略体仮名総合字体表」のなかにはある。

以上、…ルを除けば、いずれも用例が一つで、珍らしい字体であることが注目される。そこに個性が感じられ、考慮すべき問題があ

るように思われる。

次に、符号について説明する。返り点で、レ点を用いない。レ点を用いるのはずのところは一を用いるが、それが点であるか、一であるかについては、あいまいなところがあること、先に述べたとおりである。また、レ点の代わりに、仏前救下開上(六月)のように、上下を用いたところもある。しかし、一般には、上下を普通のように用いるが、仏神哀憐使中自然上_下(四月)のような用法をしたところもある。一・二・三の数字も、一般の用法に従うが、専寺別当法印以少僧言七八可三被二任当_職二之解_五状上(九月)の例は、数字を最大限に使ったもの。以上のほかに、雖然二不可_三抛_三彼_三(十一月) という符号を用いたところもある。所以欲_三入_三桃源_三崑_三陽_三以祈_三七_三長_三生_三(八月) は、数字と符号とを巧みに交用した例といえようか。

連読符は、面談(二月)に見られるように、慣例に従っているが、これは、仰而(二月)のように訓読のばあいにも用いる。なお、玉_一鬼_一内_一官_一(二月)のように、右側に連読符を用いているのは、翹_一早_一年_一變_一(二月)のような左側に符号を施しているのと対照して、音読・訓読のばあいを、それぞれ示しているかのようである。御器(四月)が音読符を示しているらしいこと(ただし、この類の用例は稀れ)と思ひ合わせて、だいたいそう考えてよいかと思うが、旬_一数_一少_一(十二月)のような例外もないことはない。

重点としては、事(二月)・ミツく(二月)・カツ(十月)などの符号が用いられている。

(七)

以上を終えて、国語学的考察に在るわけであるが、ではどんな問題が考えられるか。余白も僅かになったので、ここでは、先にあげた(□)の本文を中心に、若干の問題点を取りあげて、後日改めての発表で補うこととしたい。

まず目につくことは、散 \wedge サレ \vee (1)・塩 \wedge エレ \vee (2)・近 \wedge レ \vee (4)・鱗 \wedge リレ \vee (6)・矜 \wedge コレ \vee (7)・変 \wedge ヘレ \vee (10)などの、漢字音の韻尾を示す \vee の音価である。この音符は、平安朝では舌内音を示すものであった。では、この資料ではどうか。(□)の本文からはわからないが、「和泉往来」のなかの、約一四〇の漢字音を調べたところによると、m nの識別はないようである。m 韻尾のばあいも、この \vee であらわしている。睡 \wedge レツフルモノ \vee (四月)という、語頭音に \vee を用いた一例を除けば、ほかはすべて語中尾音のばあいだけであつて、その語尾音にはm nの区別なく、また遣 \wedge ノコレ \vee (1)のような例もあることを思うと、これはどうやらn音を示していたのではないかと考えられる。とすると、(□)にはあらわれないが、尽 \wedge ツクサレ \vee (一月)・聞 \wedge キコエレ \vee (二月)・私 \wedge ハラハレ \vee (十一月)などの \vee は、助動詞の \wedge む \vee の音価を示したものでないか。助動詞 \wedge む \vee は、天喜のところ(一〇五三〇五七)、nであつたらしいこと、すでに指摘しておいたところである。(「訓点資料と訓点語の研究」一三二頁)

これと関連するものに、ム表記がある。これは、元来字音の唇内音表記に用いられたもの。ところが、この資料ではすべて舌内音に

用いられている。散 \wedge サム \vee (2)とあるのが、そのよい例である。とすると、剪 \wedge キラム \vee (一月)・遂 \wedge トケム \vee (九月)などのムは、nであつたかと思われ、 \vee で表記されているばあいとも照応するようにである。

ところが、一方この \vee は、舟 \wedge シレ \vee (3)・老 \wedge ラレ \vee (6)・遇 \wedge クレ \vee (6)・桑 \wedge サレ \vee (10)というように、ウで表わされるころにも用いられる。n音尾にもw音尾にも使われているから、音の識別はないものと考えられるが、さらに、愚 \wedge クレ \vee (7)とあることに注目したい。これは、慮 \wedge リヨウ \vee (一月)・無 \wedge フウ \vee (一月)などの例と共に、れいの際西風の長音を示すもので、 \wedge クレ \vee の一方で、愚 \wedge クウ \vee (一月)とあることと合わせ考えたい。とすると、この \vee はuをあらわすことになり、したがって、先の \wedge ツクサレ \vee \wedge キコエレ \vee \wedge ハラハレ \vee などは、それぞれ \wedge ツクサウ \vee \wedge キコエウ \vee \wedge ハラハウ \vee であるのかも知れない。げんに、進 \wedge スマウ \vee (二月)・交 \wedge マシハラウ \vee (七月)・訪 \wedge トハラウ \vee (七月)などの例があるのである。そうすると、この資料には近い、極楽願往生歌(康治元年一一四二)に、

ウシヤウシイトヘヤイトヘカリソメノカリノヤトリライツカワカ
レウ

とあることが思い合わされ、助動詞「う」の発生と関連をもつてくる。もつとも、右の歌の「ウ」は、「ワカレム」とあるべきところを、首尾を具えるという技巧上の制約をうけている点を考慮しなければならぬから、かந்தんに割りきることではできない。

以上で、 \vee がuともnとも考えられることを述べたが、このほか

に、 $\text{ゑ}\wedge\text{カレ}\vee(9)$ のように、入声表記にも用いられていることに注意したい。ただし、国語の促音表記に用いられている例はない。

というわけで、 レ 符があらわすところは微妙である。ということでは、 nu や入声音がお互いに近い音感を与えるからである。したがって、たとえば、助動詞「ウ」のことを考えるにしても、以上に述べたことだけでは不足で、ほかの資料との対比を考えねばならぬこと、いうまでもない。この資料にかぎっていても、また音便現象とその表記の関係について触れる必要があるのだが、今は、このような問題が考えられる、というていどにとどめておく。(この項は、昨年の秋の訓点語学会で発表したものの要約である。)

(八)

かなづかいについても、論ずべきことがある。管見にいるところでは、 $\text{アイ}\downarrow\text{ヒ}$ 愛 $\wedge\text{アヒ}\vee(二月)$ 、 $\text{アイ}\downarrow\text{ユ}$ 祐 $\wedge\text{ユ}\vee(四月)$ 、 $\text{ウ}\downarrow\text{フ}$ 舟 $\wedge\text{シフ}\vee(二月)$ 、 $\text{ウ}\downarrow\text{ヲ}$ 斗 $\wedge\text{トヲ}\vee(六月)$ 、 $\text{エ}\downarrow\text{ヘ}$ 絶 $\wedge\text{タヘ}\vee(十二月)$ 、 $\text{エ}\downarrow\text{エ}$ 葉 $\wedge\text{エウ}\vee(二月)$ 、 $\text{オ}\downarrow\text{ヲ}$ 自 $\wedge\text{ヲノツカ}\vee(九月)$ 、 $\text{ワ}\downarrow\text{ハ}$ 乾 $\wedge\text{カハカサルニ}\vee(二月)$ 、 $\text{キ}\downarrow\text{イ}$ 惟(唯?) $\wedge\text{ユイ}\vee(二月)$ 、 $\text{キ}\downarrow\text{ヒ}$ 田 $\wedge\text{豆}\wedge\text{クワヒ}\vee(十月)$ 、 $\text{エ}\downarrow\text{ヘ}$ 声 $\wedge\text{コ}\vee(十月)$ 、 $\text{ハ}\downarrow\text{ホ}$ 宝 $\wedge\text{ホウ}\vee(七月)$ 、 $\text{ハ}\downarrow\text{ワ}$ 谷 $\wedge\text{キワマリ}\vee(七月)$ 、 $\text{ヒ}\downarrow\text{イ}$ 縞 $\wedge\text{スイアヤ}\cdot\text{スイモノ}\vee(二月)$ 、 $\text{ヒ}\downarrow\text{キ}$ 番 $\wedge\text{ツカキ}\vee(十月)$ 、 $\text{フ}\downarrow\text{ウ}$ 疑 $\wedge\text{ウタカウ}\vee(十月)$ 、 $\text{フ}\downarrow\text{ヲ}$ 仰 $\wedge\text{アラク}\vee(六月)$ 、 $\text{ヘ}\downarrow\text{エ}$ 古 $\wedge\text{シエ}\vee(二月)$ 、 $\text{ヘ}\downarrow\text{エ}$ 前 $\wedge\text{マエ}\vee(十一月)$ 、 $\text{ホ}\downarrow\text{ウ}$ 通 $\wedge\text{ト}$

$\text{ウ}\vee(二月)$ 、 $\text{ホ}\downarrow\text{オ}$ 咍 $\wedge\text{モヨオシ}\vee(十月)$ 、 $\text{ホ}\downarrow\text{ヲ}$ 催 $\wedge\text{モヨラス}\vee(九月)$ などの誤りが見られるが、類によって、誤用数の多少のあることはいうまでもない。右の中から、当時の発音の推考されるものがあるが、 $\text{キ}\downarrow\text{ヒ}$ の誤用例のすべてが、無為 $\wedge\text{フウヒ}\vee(一月)$ ・猪 $\wedge\text{ヒ}\vee(二月)$ ・蘭 $\wedge\text{ヒ}\vee(二月)$ ・豕 $\wedge\text{ヒ}\vee(三月)$ ・開 $\wedge\text{ヒキ}\vee(四月)$ であって、その大部分が語頭音であることは、 $\wedge\text{ワタクシ}\vee$ を $\wedge\text{ハタクシ}\vee$ と書く傾向と思ひ合わせて、興味ぶかいものがある。

語法についていうと、(一)の本文を見てもわかるように、 \wedge 待り \vee 候 \vee のないことが目立つ。漢文体であることと関係がありそうだが、その訓読語をみると、当世風の形のくずれたことばのあることに気づくであろう。計 $\wedge\text{カスウ}\vee(10)$ 〔 $\wedge\text{カスヘ}\vee$ の例が(正月)にある〕の例など、語史上から注目値する。

そういえば、一般的にいつて、古語に乏しく、当時の用語と思われるものが散在しているようだ。若干の例をあげるならば、越 $\wedge\text{ワシル}\vee(六月)$ ・且 $\wedge\text{カツカツ}\vee(八月)$ ・扱 $\wedge\text{エラム}\vee(九月)$ ・所以 $\wedge\text{ソエニ}\vee(十月)$ など、古いところにもあるが、「和泉往来」の前後によく使われたことばである。それらの中で、稍 $\wedge\text{ハクヤク}\vee(二月)$ があるのはおもしろい。 $\wedge\text{ヤウヤウ}\vee$ の源流に関連するからである。すなわち、かつて有坂秀世博士が、 $\wedge\text{ヤウヤウ}\vee$ の源流を考えるに当って、重種本神楽歌に $\wedge\text{ヤクヤク}\vee$ のあることを指摘されたが(「国語音韻史の研究」五三六頁)、それと同じ例が、ここにもう一つ加わったわけである。というわけで、今日のところ、 $\wedge\text{ヤクヤク}\vee$ は二例にすぎないが、 $\wedge\text{ヤクヤクニ}\vee$ は、「世

俗諺文」(平安朝末)と「春秋経伝集解」(一一三九)とにあつて、いづれも「和泉往来」と前後する資料である。ハヤウヤウVの成立を語史的に見るならば、おそらくは、ヤクヤクVヤウヤクVヤウヤウであろうが、それならば、ハヤクヤクVの形が古いところにあつてよかりそうである。にもかかわらず、ハヤウヤクVが「四分律」「地藏十輪経」のような、平安朝初期にあつて、ハヤクヤクVがあらわれるのは、その末期なのである。この現象をどのように解決したらよいか。春日博士・有坂博士のご高見もさることながら、この源流と沿革については、神田本「白氏文集」卷三の、竈ハヤクヤクかヤクヤクかVの訓と合わせて、もう一度考え直してみることがあるのではなからうか。(私見は、昨秋の国語学会および訓点語学会で触れておいた。)

古いところにはないが、「和泉往来」の前後にあらわれることはとしては、給ハフフムV(二月)・揺ハヲコカスV(七月)・聳(ソヒケ)V(四月)などいろいろある。そのほか、当時のことばを集めたと思われる「名義抄」も参考になるが、それと一致するものもかなりある。そのなかにあつて、策ハフチウチV(九月)は注目されることばの一つであろうが、それと共に、後世俗に使われる、為体ハテイタラクV(四月)が見えているのもおもしろい。もっとも、この資料と成立の時期を等しくすると思われる「伊呂波字類抄」にはあるが、俗語といえ、所謂ハイハイルV(四月)・凡ハヲヨスV(四月)・縦ハフクロフV(六月)・囁ハウクコスV(十一月)などは、当時の字書を始めたとする文献に見ないことばである。おそらくは、俗語ではなからうか。とすれば、これは「当時の俗語

を混じている」という、往来物の特質を語っている例とならうか。

(九)

以上述べてきたことを、次にまとめてみよう。(曰本文の一部紹介と解説、曰作者(撰者)と年代、四「和泉往来」の訓みについて、田資料としての「和泉往来」の価値、内かなと符号について、(外)国語学のうえからみた、二、三の問題、ということになる。このうち、(外)については、問題点を抽出したということとどまる。問題は、これらが手がかりになつて展開するであらう。もちろん、このほかにも問題がないわけではないが、今は、主な点について述べてみたのである。

因みに、この資料は、一九五九年の夏、高野山において、文化財保護委員会美術工芸課の方々が調査されたさい、西南院の経蔵から発見されたものである。たまたま、同院に滞在していたよしみで、親しく目に触れることができた。卷子本の軸なし。高野紙。たて二九センチ六ミリ、よこ六・四七五メートル、一紙のよこ三七・五センチ。外題なく、尾首欠損のため内題は見えないが、わずかにハ西室作Vの字が見える。この資料は、その後、重要文化財に指定された。ここに、ひきつづいて調査の便宜をはかつて下さつた田山方南氏、その他の方々に、厚く謝意を表す。なお(外)に述べたことについては、稿を改めてくわしく論じるつもりである。(一九六〇・二・一 渡独を前にして)

— 京都大学教授 —